

●ヨハネス・マリア・シュタウト (1974~)

『革命よ、聴くんだ (ほら、仲間だろ)』

アンサンブルのための (2021)

音楽において革命とは何だろうか？それは政治における革命とは完全に異なるのか、それともたんに政治的変動を反映するだけなのか？どのようにそれは姿を現すのか？音を立ててこれみよがしに、落ち着いてほとんど勝ち誇ったかのように現れるのか、それとも静かにほとんど人目につくことなく、裏口から入るかのように現れるのか？そもそも芸術における革命を進歩と同一視できるのか？疑問は尽きない……

私の作品は17パートのアンサンブルのために書かれており、いくつかの短いセクションを含んでいる。形式における緊張を生じさせる断片的なセクションは、しだいに複雑なものになってゆく。そこからは、つねに安定することのない混合体が立ち現れる。セクションは明瞭な輪郭をもつ身ぶりから組み立てられていながら、たえず互いに影響し合い、作品が進むなかでみずからのアイデンティティを変えもする。このように混ざり合った状態は、いつ何時でも予期せぬ仕方ですら「転倒」し、革命を誘発し「煽動」する可能性があるのだが、それらの革命によって、音楽の状況は根本的また永続的に変化してゆく。

2021年5月

[ヨハネス・マリア・シュタウト／平野貴俊 訳]

Fl (Picc / A-Fl) / Ob (E-Hrn / Tri) / Cl (Bs-Cl) / Fg - Hrn / Trp / Trb - 2 Perc (I=3 Crotales / Vib / 2 Finger Cym / 3 Chinese Opera Gongs / Hi-Hat / Tam-Tam / Thunder Sheet / 2 Djembes / Bass Drum II=Marimbaphone / 6 Gongs / 2 Finger Cym / Tri / 3 Chinese Cym / Tam-Tam / Thunder Sheet / Snare Drum / 2 Timbales / Bass Drum / Sand Block) - Cel (Chinese Opera Gong / Thunder Sheet / 2 Maracas) - Prepared Pf - Vn I (Maracas) / Vn II (Maracas) / Va / Vc I / Vc II / Cb

初演 2021年11月15日 ウィーン・コンツェルトハウス ウィーン・モデルン
ペーター・ブルヴィーク指揮、20世紀アンサンブル
委嘱 20世紀アンサンブル

●ミレラ・イヴィチェヴィチ (1980~)

『サブソニカリー・ユアーズ』

アンサンブルのための (2021)

そう、ほとんどサブソニックで。厚い壁の背後で起こる爆発の音。束縛の多い現実にあって自分自身であること。ビッグバンのための小さな空間。暗闇、いく筋かの光。極小のひび、宇宙。

[ミレラ・イヴィチェヴィチ／平野貴俊 訳]

Bs-Fl / Cl - Trp - Perc (Crotales / 2 Cym / Chinese Cym / Snare Drum / 2 Tom-Toms / Bass Drum) - Pf - Acc - Vn / Vc

初演(放送) 2021年4月25日 テイトゥス・エンゲル(指揮) ほか

委嘱 ヴィッテン現代室内音楽祭(ドイツ)

献呈 クラנגフォルム・ウィーン

●塚本瑛子 (1986~)

『輪策赤紅、車輪』

大アンサンブルのための (2017)

このタイトルが例示しているのは、個々の要素を結びつける唯一の規則が存在するのではなく、要素同士はそれぞれ異なる関係性によって多義的に、しかし何らかの連続性を伴って繋がっているという状況であり、それが私がこの曲で具体的に表現しようとしたことである。

[塚本瑛子]

Fl (Picc) / Ob / Cl (Es-Cl / Bs-Cl) / Fg - Hrn / Trp / Trb - Hrp - Pf - 2 Perc (I=Vib / Hi-Hat / Suspended Cym / Ratchet / Bass Drum II=Xyl / Metal Sheet / Ratchet / 3 Wood Blocks / Snare Drum / 2 Metal Blocks / Slapstick / Bass Drum) - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

初演 2017年8月26日 ロワイヨモン修道院(フランス)

ジャン=フィリップ・ウルツ(指揮)、アンサンブル・ユリシーズ

委嘱 ロワイヨモン修道院

●武満 徹 (1930~96)

『トゥリー・ライン』

室内オーケストラのための (1988)

ロンドン・シンフォニエッタの創設20周年を記念して委嘱され、1988年に完成された室内オーケストラ曲。『樹の曲』(61)以降タイトルに木をしばしば用い、「私は樹が好きだ。それも、灌木の茂みよりは喬木の林を、寧ろそれよりは天空へ向って聳え立つ一本の巨樹に魅せられる」(『音楽の余白から』)と語った武満は、仕事場としていた長野県御代田町の山荘近くに佇む並木に着目した。「その、小高い坂道に沿って立ち並ぶ、長いアカシアの並木の下を歩くとき、私の疲れた心は、いつもきまって、癒される。[...]この曲は、優美で気丈な、その樹々へのオマージュとして作曲された」。

聴く人を並木路へと誘うかのような序奏を経て、樹木を思わせる清冽な音を発する管楽器のあいだで掛け合いが行われるが、上行したのち下行する終始反復される音型は、のちに『ハウ・スロー・ザ・ウィンド』(91)、『そして、それが風であることを知った』(92)など、風をテーマとする作品で多用された。中盤、「Æolian rustling (風のそよぎ)」と記されたハープの伴奏、エオリアン・ラスリングピアノの上行音型を背景として、フルートが指定された7音による「bird's calling (鳥のさえずり)」を即興する箇所では、散歩者が歩みを緩めあるいは立ち止まって、鳥の声に耳を傾ける様を彷彿とさせる。最後は、舞台を去ったオーボエ奏者が「Slowly as from far beyond (ゆっくりと遠くからのように)」音を届ける。 [平野貴俊]

FI (A-Fi) / Ob / 2 Cl (Bs-Cl) / Fg (C-Fg) - 2 Hrn / Trp / Trb - 2 Perc (I=Vib / Crotales II=Tubular Bells / Glock / 2 Cym on Pedal Timp / Crotales) - Pr (Cel) - Hrp - Vn I / Vn II / Va / Vc / Cb

初演 1988年5月20日 クイーン・エリザベス・ホール(ロンドン)

オリヴァー・ナッセン(指揮)、ロンドン・シンフォニエッタ

委嘱 ロンドン・シンフォニエッタ20周年記念(ヨーロッパ日興証券の援助による)

献呈 池藤なな子、サリー・グロウズ

●ゲオルク・フリードリヒ・ハース (1953~)

『ああ、たとえ私が叫ぼうとも、
誰が聞いてくれよう…』

打楽器とアンサンブルのための (1999)

ザルツブルク音楽祭のコンサート・ディレクター ハンス・ランデスマン(1932~2013)が、同音楽祭で行われる演奏会「ネクスト・ジェネレーション」のために委嘱した作品。

1999年のイースター休暇中、本作を仕上げるためクロアチアに滞在していたハースは、妻との朝食中にNATOの戦闘機が上空を通過する際の音を聞き、その恐ろしさに戦慄する。当時はコソボ紛争の只中であり、戦闘機はベオグラードに向かっていった。タイトルをライナー・マリア・リルケ(1875~1926)の『ドゥイノの悲歌』冒頭「ああ、たとえどのように叫ぼうとも、誰が天使らの序列から耳傾けてくれようか」(高安国世訳)から借用したハースはしかし、本作は政治的プロテストではなく、あくまで戦争を前にした自身の絶望、無力感の表現であると語っている。ハースは以後自作をたびたび政治と関係づけているが、それは2016年に『ディー・ツァイト』紙で告白された、ナチスを支持する家族から虐待に近い躰を受けていたという自身の生い立ちと無縁ではないのかもしれない。

打楽器とアンサンブルのための作品だが、この編成から予想される独奏の鮮やかな名人技は皆無。微分音を含みながら徐々に推移する平面的な音響の上で、これとはほとんど無関係なかたちで、サスペンデッド・シンバルを主とする種々の金属打楽器が、さまざまな緩急で連打される。後半では長三和音の響きから5度の音程が浮かびあがり、カデンツァを経て、独奏とアンサンブルが同期しながら跳躍の多い音型を反復する。 [平野貴俊]

Solo Perc (Crotales / Suspended Cym / Tuned Gongs / Tam-Tam / Metal Instruments) - FI (Picc) / Ob (E-Hrn) / Cl (Es-Cl) / Bs-Cl (Es-Cl) / S-Sax (T-Sax) / Fg - Hrn / 2 Trp (Picc-Trp / Flügelhorn) / 2 Trb / Tub - Perc (Crotales / Vib / 4 Tuned Gongs / Temple Block / 2 Suspended Cym / Tam-Tam / Lion's Roar) - Acc - 3 Vn / 2 Va / 2 Vc / 2 Cb

初演 1999年7月28日 ザルツブルク

シルヴァン・カンブルラン(指揮)、ロビン・シュルコフスキー(打楽器)、

クラックフォルム・ウィーン

委嘱 ザルツブルク音楽祭